
『スクリップル』を読むために¹

松田智裕

1. はじめに

1977年の「スクリップル」は、1967年の『グラマトロジーについて』（初出は1965年）の試みと地続きの関係にあると思しき論考である。冒頭で語られているように、この論考の主眼はウォーバートンの『エジプト人のヒエログリフに関する試論』（以下『試論』）を読解しながら、「書くこと (écrire)」と「権力 (pouvoir)」の関係を考察することにある。しかし、その過程でデリダは『グラマトロジーについて』との関連についても言及しており、60年代以降から前景化する一連のエクリチュール論との連続性を感じさせる内容となっている。だとすれば、「エクリチュール」という一見論じ尽くされたかに見えるテーマについて、「スクリップル」はなにか新しいことを教えてくれるのではないか——こうした期待を胸にこの論考を読み進めているのは、筆者だけではないだろう。

したがって、次のような問いが自然と浮かびあがる。「スクリップル」は、『グラマトロジーについて』に代表される1960年代のエクリチュール論とどのような関係にあるのか。両者は地続きなのか、それともなんらかの差異をもつのか。この問いを本格的に検討するためには、もちろん1960年代に発表された著作・論文と「スクリップル」との詳細な比較検討をしなければならないだろう。しかし、そうした作業に取り組む前にまず、両者を比較するうえで問題になるであろういくつかの論点をピックアップしておく必要がある。そこで、本稿では今後のたたき台として、そうした論点のマッピングを行うことにしたい。

2. 「スクリップル」の概要

まず、議論の前提として、「スクリップル」の背景を簡単に確認しておきたい。この論考が刊行された1970年代はデリダが18世紀フランス哲学の研究に取り組んでいた時期でもある。その代表例として、コンディヤックの『人間認識起源論』の序文として執筆された1973年の『たわいなさの考古学』があり、未刊行セミナーも含めるなら、1971-1972年度の「18世紀における哲学と修辞学：コンディヤックとルソー」講義²がある。また、これらの研究は教育の問題と結びついて、

¹ 本稿は、2021年2月19日に開催された「デリダ『スクリップル』(月曜社)を読む」(脱構築研究会主催)で読み上げた原稿を加筆修正したものである。当日は登壇者の大橋完太郎氏に加えて、フロアの参加者の方々から数々の有益なご指摘をいただいた。記して感謝を申し上げる。

² この講義の内容を知るための資料として、2020年に出版された『言語の計算』がある。『言語の計算』は『弔鐘』と同じく、同じ頁に異なる内容の二つの文章列を載せるという体裁をとっているが、編者のBenningtonとChenowethによれば、左列の文章は「18世紀における哲学と修辞学」をもとにしているという (cf. Bennington & Chenoweth 2020, p. 10)。

1974-1975 年度に「GREPH (フランス観念学派における観念学の概念)」という講義³が行われる。

「スクリッブル」でも、『人間認識起源論』のなかでコンディヤックがウォーバートの『試論』を踏まえて「文字」を論じていることから、観念学派とウォーバートの関係について言及がある (cf. S, 13f./21f.)。「スクリッブル」はこれら一連の研究と呼応しており、デリダ本人が振り返っているところでは、その端緒になったのが『グラマトロジーについて』である (cf. S, 14/22)。

内容については、訳者の大橋完太郎氏による詳細かつ明快な解説があるので (大橋 2020)、詳しくはそちらを参照していただきたい。ここでは、「スクリッブル」の問題設定を必要な範囲でごく簡単に見ておきたい。

この論考のタイトルでもある「スクリッブル (scribble)」は英語で「走り書き」を意味する言葉であり、「大急ぎで縮約して [à l'économie] 書く仕事のこと」(S, 9/14) を指す。ウォーバートの『試論』を読解するにあたって、デリダはこの言葉を「書記 (scribe)」と「篩 (crible)」のアナロジーに結びつけている (cf. S, 8/12)。ホラポロンのヒエログリフにもあるとおり、エジプト人にとって「書記」は学知の営みであるとともに、「篩が良い穀物と悪い穀物とを分けるのと同じように、生と死を判別する」ことでもあるが、デリダはこのアナロジーを、「分ける」を意味するギリシャ語の「クリネイン」に関連づける。それによると、このアナロジーが示しているのは、「分離し、峻別し、境界を記し、これとあれとのあいだで決定し、排除し、つまり、選び、選抜し、一方のものを好み、価値を評価し、階層化し、選出する機能」(S, 8/12) である。つまり、「書記」と「篩」のアナロジーが示しているのは、価値ある知とそうでない知を切り離し、一方を選択して他方を排除するような「書くこと」の機能である、というわけである。「クリネイン」という語によって想定されているのも、こうした「選択」と「排除」の二つからなる「書くこと」の機能であって、彼が「書記」と「篩」のアナロジーを「批判 (critique)」という「クリネイン」由来の語を用いて検討しているのも、そのためである (cf. S, 8/12)。

ここからデリダは、大きく分けて、二つの方向に議論を進める。(1) ひとつめの議論は、文字と権力の関係はいかなるものか、というものである。「書記」と「篩」のアナロジーは「書くこと」に伴う選択と排除という二つの機能を示しているが、選択や排除は「枠 (cadre)」や「方眼 (grille)」があるからこそ生じる。デリダが挙げる例で言えば、『試論』は「パランプセスト」というコレクションから出版されているが、その刊行は監修者や編集機構といった枠組みのなかでなされ、その監修も政治や経済など様々な枠組みによって規定されている (cf. S, 10ff./15ff.)。このような枠組みにしたがって、『試論』について書いたり読んだりするのであって、この点で「枠」は、紙を節約するために書物のある面を価値づけ、他の要素を排除するよう指令している (デリダの用語法では、こうした選択と排除の構造は「プログラム」と呼ばれる)。彼によれば、ウォーバートは書記官でもあった「神官 (prêtre)」とヒエログリフの関係を検討することで「枠」の問題を独自に思考しようとしていたのであり、この点で、「エクリチュールの政治的・宗教的権力」(S, 15/24)

³ 1976 年の論考「教員団体はどこではじまり、いかに終わるのか」は、この講義で読みあげられた原稿をもとにしており (cf. DP, 111ff./ (1) 97ff.)、コンディヤックの『パルマ公国王子のための教程』の読解もなされている。

は『試論』の中心問題をなす。

(2) デリダは、こうした「枠」の問題を「クリプト」という言葉を用いて捉え直そうとしている。周知のとおり、「クリプト」は「隠れた」を意味するギリシャ語の「クリプトス」に由来する言葉だが、デリダによれば、選択と排除は、ある側面を現れさせるとともに別の面を除外し、隠すことを意味する⁴。『試論』は、マルペンヌが『証明されたモーセの聖なる派遣』から一部抜粋し、それを仏訳して成立したものだが、マルペンヌはウォーバートンが提唱した理論を補強するために (Malpeines [1744]1977, p. 91f.)、欄外に数々の長大な概略と注を加え、さらに「中国における初期の書き文字についての考察」といった諸論考を補足として付け足す。デリダによれば、ここで問題となっているのは、元の形がわからなくなるほど、注や補足という「余分なもの」が次々と加わるなかで、テキストのある面が選択される（現れる）とともに、除外される（隠される）面も増大し、テキストが再構成され、重層化されていく、という事態である (cf. S, 14ff./17ff.)⁵。彼の見立てでは、この問題はウォーバートン自身の理論とも無関係ではなく、たとえば「スクリッブル」の後半部でデリダは、エジプトにおける動物・植物崇拜や神官と宗教の関係をめぐる『試論』の記述に、こうした「クリプト」の問題を読みとろうとする (cf. S, 41ff./66ff.)。

以上が、「スクリッブル」の大まかな問題設定である。以上を踏まえて次に、この論考と 1960 年代のエクリチュール論の関係を考えるための論点をいくつか取り出してみよう。

3. 論点

すでに述べたように、「スクリッブル」は『グラマトロジーについて』の問題意識が強く見られる論考である。実際、デリダは「クリプト」に言及する際に、「原-エクリチュール」や「代補」という『グラマトロジーについて』以来の概念を用いている (cf. S, 13, 42/21, 68)。しかし、両者のあいだには必ずしも連続性だけがあるわけではなく、微妙な相違もある。では、そうした違いも含めて、『グラマトロジーについて』(および他の著作)と「スクリッブル」の関係をどのように考えるべきなのか。以下では、この関係を考えるうえで問題となりうる論点を 3 点列挙しよう。

(a) デリダにおけるウォーバートンの位置

最初の論点として、デリダにおいてウォーバートンはいかなる位置を占めていたのかという点が挙げられる。『グラマトロジーについて』の第 3 章「実証科学としてのグラマトロジー」のなかで彼は、マドレーヌ・V・ダヴィッドの『17・18 世紀における文字とヒエログリフに関する論争』(1965 年)を参照しながら、普遍言語、中国の漢字、ヒエログリフをめぐる近代ヨーロッパの議

⁴ 「すなわち、あるものが産み出される（あるものを出版し、あるものにかかせて、ないしは好きにかかせて、あるものを現れさせる）と同時に、別のものが消される（別のものの動きを麻痺させて、抑圧し、とにかくそれを強制的に秘匿する）のである。現れるよう仕向け、覆いをはがすのと同時に、クリプトが作られる […]」(S, 10/15)。

⁵ デリダはこの事態を、「エクリチュール」と「クリプト」をあわせて「エクリプチュール *écripture*」と呼んでいる (cf. S, 7/11)。

論を考察していたが、ウォーバートンの名前もこうした文脈のなかで登場する。それによれば、デカルトに端を発する普遍言語の問題はキルヒャーやライプニッツを介して漢字とヒエログリフにそのモデルが求められるようになるが、なかでもキルヒャーは自然や神性に隠された神秘性を提示するヒエログリフを重視する (cf. DG, 119f./ (上) 164f.)。デリダの考えでは、ここには合理主義と神秘主義の「共犯性 *complicité*」が存在するが、それにある種の「認識論的断絶」をもたらした人物として、つまりこの「共犯性」を解体し科学的なヒエログリフ解読技術を準備した人物として、フレレとともにウォーバートンの名が挙げられる⁶。

このように、ウォーバートンへの言及は『グラマトロジーについて』にも見られるものの、それはあくまで、実証的な解読技術としての「グラマトロジー」が成立した過程を考察する、という文脈でなされている点に注意する必要がある。知られるとおり、『グラマトロジーについて』の第3章「実証科学としてのグラマトロジー」の主眼は、こうした個別科学としての「グラマトロジー」とは別に、「原-エクリチュール」や「代補」に関する学としての「グラマトロジー」(デリダ的な意味での「グラマトロジー」) がいかに可能かを問うことにある。したがって、『グラマトロジーについて』でのウォーバートンへの言及は前者(個別科学としての「グラマトロジー」)にかかわるが、「スクリップル」では、『試論』のなかに「クリプト」の契機を読みとることが問題なのだから、後者(デリダ的な意味での「グラマトロジー」)にかかわることになる。こうした違いをどう考えるべきなのか。この問題は、『グラマトロジーについて』と「スクリップル」の関係を考えるためのひとつのポイントになるように思われる。

(b) 書物と自然

第二の論点として、書物と自然の問題が挙げられる。ここで「書物」とは、世界が解読すべき暗号によって編まれた書物であるという考え方である。こうした世界と書物の関係を取りあげた同時代のテキストとしてはフーコーの『言葉と物』(1966年)があるが、デリダも『グラマトロジーについて』のなかで両者の関係を検討している。彼によれば、書物という概念は真理が自然にあらかじめ書き込まれているという「意味された真理の体系」(DG, 27/ (上) 39)を意味すると同時に、魂に刻まれた神の命令を聴くという「霊気学的 *pneumatologique*」な文字観を示している。こうして書物と自然が「声」に結びつけられ、いわゆる「音声中心主義」の問題が浮上したことはよく知られているだろう。

類似の議論は、「スクリップル」にも見られる。たとえば、『試論』に依拠して、自然と身振り言語、声との関係を検討した箇所(S, 17-21/28-35)はその最たる例である。もっとも、『グラマトロジーについて』では、プラトンから現象学や構造主義にいたる歴史を参照しながら、書物と自然をめぐる問題の系譜を検討することに軸足があったのに対し、「スクリップル」では書物と自然

⁶ 「そのとき、バシュラールとともに「認識論的断絶」と呼べるようなものが、とりわけフレレとウォーバートンによってもたらされる。彼ら二人は骨身を惜しまぬ救出によって、前者は中国を、後者はエジプトを例にとることで、こうした決断を準備したのであって、その救出をたどることができる」(DG, 120/ (上) 165)。

は「権力」の問題に結びつけられる。それでは、「スクリップル」に顕著な「権力」の主題化をどう考えるべきなのか。たとえば、『グラマトロジーについて』にも「権力」の問題はなにかしらの形で潜在していたと考えることができるのか、それともできないのか。この論点は、(a) で見た、『グラマトロジーについて』と「スクリップル」におけるウォーバートンへの態度の違いを考えるうえでも問題になるように思われる。

(c) 文字と教育

これまで『グラマトロジーについて』との関連性について見てきたが、最後に他の著作との関連についても確認しておきたい。すでに見たように、「スクリップル」の主要なテーマに「権力」の問題があるが、同時期の論考には「権力」を主題的に考察したものがいくつかある。その一例として、「スクリップル」の前年に発表された「教員団体はどこではじまり、いかに終わるのか」(1976年)を挙げることができる。そこでデリダは、当時彼が ENS で職務についていた「アグレジェ復習教師」を例にとりながら、哲学教育の現場において教師の活動を暗に枠づけている様々な制度機構を問題にしていた。デリダによれば、教師は試験の評価基準を念頭におきながら、テーマ設定の仕方や論理的で説得的な議論の組み立て方を学生に教えるのであり、こうした教師の活動は試験の評価基準を設定する審査員や省庁の方針によって規定されている。要するに、教育は「権力」との力関係のなかで規定された活動なのであって、こうした力関係とは無関係に、哲学の知識や哲学的な思考法を伝授するだけの中立的な活動では決してない、というわけである⁷。では、哲学教育はこれまでどのように権力機構の介入を蒙り、過去の哲学者たちは権力の介入にいかなる態度を示してきたのか——こうした問題設定のもとデリダは、コンディヤック、カント、ヘーゲル、クーザンなどを参照しながら、「哲学教育の変形」を模索することになる (cf. DP, 121/ (1) 108)⁸。

このように見てみると、GREPH 期の哲学教育論もまた一種の権力論であることがわかる。とすると、「スクリップル」との関連もおおのずと見えてくる。すでに見たように、「スクリップル」では、「書くこと」(あるいは「解釈」)を規定している政治的な「枠組み」が問題になっていたが、これはこの時期の哲学教育論とほぼ重なる議論である。もちろん前者は文字、後者は教育といった具合に扱うテーマに違いはあるものの、ともに学問と政治、学知と権力の関係性を問うている

⁷ 「教育制度の構造、その形態、規範、可視的ないし不可視の制約、枠組みが自然のものとみなされ、昨年、私たちがパレルゴンの [parergonal] と呼んだ装置の全体——教育制度を取り囲むように見えて、実はその内実の中心にいたるまで、おそらくその中心から教育制度を規定しているこの装置全体が自然なもの [...] とみなされることであらゆる力と利害とを巧みに覆い隠されてしまう。これらの力と利害はいささかも中立的ではなく、絶えざる闘いの攪乱によって不均質と分断を孕んだ闘争領域の内部から、教育のプロセスを支配し制御し、幅をきかせている」(DP, 113-114/ (1) 100)。

⁸ デリダの哲学教育論における「制度」の問題については、西山 2013 を参照されたい。そこで西山は、「署名」や「大学」、「領域交差」といった主題との関連から、1970年代から1990年代にいたるデリダの「制度」の問題化を詳細にたどっている。

点で、両者は表裏一体の関係にあると考えることができるだろう⁹。

このことは、(b) で見た「書物と自然」という主題の拡がりを考えるためのヒントになるように思われる。たとえば、「スクリッブル」と同じ年に発表された論考「ヘーゲルの時代」のなかでデリダは、哲学教育が国家教育へと編成されていく過程を考察しているが、その途上でヒエログリフと自然の関係に触れている。そこで彼は、『大学と哲学の擁護』のなかで「偉大な自然的諸真理 (*grandes vérités naturelles*)」に言及したクーザンの以下の一節に着目している。

これらの真理が人間の道德生活に必要であればあるほど、神は人間の理性がそれらの真理に到達可能であることを望まれました。神は、これらの真理を野心的な科学のヒエログリフのもと曇らせることなく、熟達した師が現れさせようとする光輝に満ちた文字によってそれらの真理を知性と魂のなかに刻み込んだのです (Cousin 1844, 123)。

教育のなかで学生の知性に刻まれる知識（「野心的な科学のヒエログリフ」）は、魂にもともと神が刻んでいた自然的真理（「光輝に満ちた文字」）を覆い隠す。こうした自然的真理を露にするために必要とされるのが哲学教育である。デリダはこのような文字観を「神的エクリチュール (*écriture divine*)」と呼んだうえで、次のように言う。

二次的で人工的、クリプト的でヒエログリフ的かつ無音の悪しきエクリチュールは、善きエクリチュールを隠すために不意にやってくる。悪しきエクリチュールは魂への真理の自然な刻み込み [*inscription naturelle de la vérité dans l'âme*] に覆い重なり、それを隠し、複雑にし、歪曲し、変質させるのである (DP, 189/176)。

ここで問題とされているのは、魂に刻まれた自然的真理としてのエクリチュール（「善きエクリチュール」）とそれを覆い隠す二次的なエクリチュール（「悪しきエクリチュール」）の対立であり、そうした対立のうえに成立する自然主義的な真理観である。とりわけ着目すべきは、この引用のなかで、「悪しきエクリチュール」が「クリプト」として語られている点である。つまり、ここでデリダは自然的真理を覆い隠すエクリチュールの隠蔽の機能を哲学教育との関連から問題にしているわけである。

これを踏まえるなら、やや図式的な言い方になるが、『グラマトロジーについて』のなかで取りあげられていた「書物と自然」の問題が、GREPH 期では「教育と権力」の問題を介して再び前景化したと考えることができる。そして、「スクリッブル」のなかで自然と真理を変質させる文字による「覆い [*voile*]」が語られ (cf. S, 21/35)、それが権力の問題として検討されることもあわせて考えるなら、デリダにとって文字と教育という一見異なる二つの主題は、自然と権力という主題

⁹ 「スクリッブル」の冒頭箇所には、選択と排除からなる「解釈」の構造が教育と関連づけられている箇所がある。「読むことが命令になる。それだけでも十分なのに、教育 [*instruction*] は、読書の方法を規定することなしには決して進まない」 (S, 7/10)。

を媒介として「エクリチュール」という同じ問題の布置に位置していると捉えることもできるだろう。以上を踏まえるなら、『グラマトロジーについて』以来の「記号」の問題系と1970年代の哲学教育論に見られる「権力」の問題系の係留点として、「スクリップル」を位置づけることもできるのではないだろうか。

4. おわりに

これまで、デリダにおけるウォーバートンの位置、書物と自然、文字と教育という三つの観点から「スクリップル」を読み解くための論点を取りだしてきた。もちろん、これ以外にも問題になりうる論点は多数あるだろう。とはいえ、少なくとも、「スクリップル」を起点としてデリダの思想を見渡すと、いわゆる「エクリチュール」という主題について、これまでとは違った見方ができるということはそれなりに言えるはずである。しかし、冒頭でも述べたように、それを検証するためには、これまで見てきた3つの論点（あるいは、他の可能な論点）に沿って、1960年代の著作・論文や同時期の著作・論文・講義草稿との詳細な比較検討が不可欠である。今後の課題としたい。

略号

デリダの著作・論考からの引用は、次の略号とともに頁数を原書／日本語訳の順で本文中に記す。なお、引用にあたってはなるべく既存の訳文を尊重したが、引用者の判断によって一部訳文を変更したことがあることをお断りしておく。

Jacques Derrida,

DG : *De la grammatologie*, Minuit, 1967. [『根源の彼方へ グラマトロジーについて (上・下)』足立和浩訳、現代思潮新社、1972年]

DP : *Du droit à la philosophie*, Galilée, 1990. [『哲学への権利 (1・2)』西山雄二・立花史・馬場智一訳 (1)、西山雄二・立花史・馬場智一・宮崎裕助・藤田尚志・津崎良典訳 (2)、みすず書房、2014=2015年]

S : « Scribble : pouvoir / écrire », *Essai sur les hiéroglyphes des égyptiens* de W. Warburton, traduit par Léonard Des Malpeines, éd. Palimpseste, Flammarion, 1977, p. 5-43. [『スクリップル 権力／書くこと 付：パトリック・トール「形象変化 (象徴的なものの考古学)」』大橋完太郎訳、月曜社、2020年]

参考文献

Bennington, Geoffrey et Chenoweth, Katie (2020) : « Phalanges : préface », *Le calcul des langues* de J. Derrida, Seuil, 2020, p. 7-23.

Cousin, Victor (1844) : *Défense de l'université et de la philosophie* (3e éd.), éd. 1844, Paris, Joubert, rééd.

Hachette Livre Bnf.

Malpeines, Léonard Des (1977) : « Avertissement » (1744), *Essai sur les hiéroglyphes des égyptiens* de W.

Warburton, traduit par Léonard Des Malpeines, éd. Palimpseste, Flammarion, 1977, p. 91-95.

大橋完太郎 (2020) : 「訳者あとがき」、『スクリッブル 権力／書くこと 付：パトリック・トール「形象変化（象徴的なものの考古学）」』大橋完太郎訳、月曜社、2020年、132-142頁。

西山雄二 (2013) : 「哲学への権利と制度への愛」、『人文学と制度』西山雄二編、未来社、2013年、280-305頁。